様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１８５４８

研究課題名（和文）ポピュラー音楽をテクストとした自由の概念分析

研究課題名（英文）Concept Analysis of Freedom Using Popular Songs as Text

研究代表者
河野　勝（Kohno, Masaru）

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：７０３０６４８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,800,000円

研究成果の概要（和文）：1960 年から2016 年までの『ビルボード』の各年の上位40曲、『ローリングストーンズ』が選ぶベスト500曲の歌詞を全てクリーニングした上でテキストデータ化し、歌詞の中でのfreeおよびfreedomという言葉の表出パターンを一般的なシソーラス辞典および、心理学者たちの間で利用されているLIWC (Linguistic Inquiry and Word Count)に照らして分析した。また、北米の三つの都市で20人以上の音楽関係者から、「自由」という言葉が歌詞に入っている楽曲やそうした楽曲の中でとりわけ印象に残っている歌詞のフレーズは何かについて、インタヴューデータを収集した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
自由は、アメリカという国家の存立を、その誕生から今日にいたるまで一貫して支え続ける中心的概念であり、またより広く北米社会におけるさまざまな価値規範や行動指針を規定しているという意味でも重要な概念でもある。本研究は、北米のポピュラー音楽の中で自由がいかに表現されてきたかを分析し、この概念の核心性と多様性を実証的に裏付けるとともに、それが時代とともにどのような変遷をたどってきたかを検証した。その意義は、知識人や政治エリートの言説ではなく、広く親しまれている楽曲の歌詞を概念分析のテクストとして用いることにより、自由の概念を一般の人々が受容しかつ発展させてきたものとして捉え直したことにある。

研究成果の概要（英文）：In this study, I collected the text data originally scraped but properly refined from all the songs that are ranked in the annual top 100 list of Billboard Chart from 1960 to 2016 and the Rolling Stone Magazine’s “500 Greatest Songs of All Time,” and analyzed the pattern which the word "free" and/or "freedom" appear in these lyrics based on the widely used online thesaurus as well as LIWC , or Linguistic Inquiry and Word Count, text analysis software widely used by psychologists. In addition, I conducted interviews with more than 20 musicians and/or music-related personnel in three major cities in North America, and collected survey data regarding what particular songs they think of that include the words free or freedom, and what particular phrases they remember most in such songs.

研究分野：政治学

キーワード：政治理論　自由　テキスト分析　ポピュラー音楽　北米　概念分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

自由（freedom）の概念をめぐっては、政治学、とりわけ政治理論の分野において、膨大な学術的思索の蓄積があることが知られていた。しかし、従来の研究では、哲学者や思想家の著作、政治家の演説、裁判所の判決・意見などがテクストとして用いられることはあっても、ポピュラー音楽の歌詞を題材にして概念分析が試みられたことはなかった。研究代表者（河野）は、アメリカの二つの大学（エール大学とスタンフォード大学）で大学院教育を受け、またカナダの大学（ブリティッシュコロンビア大学）で正規に教鞭をとった経験をもち、長期にわたる現地での生活を通じて、北米では、自由の概念が単に抽象的に成立するのではなく、たとえば恋愛や結婚、子供に対する躾など人間関係をめぐる価値観の一部として、また学校や組織、地域コミュニティーなどとどう関わるかについての行動指針として、きわめて具体的で日常的な場面に則して一般の人々の生き方に影響していることを何度も思い知らされた。それゆえ、研究代表者は、社会や文化にかくも広範かつ繊細に根付いている自由の概念を、知識人や政治家たちの言説のみを題材にして検討することには限界があるという認識をかねてよりもっていた。おりから、研究代表者は、政治学を二分してきた経験分析と規範分析とを架橋する必要性を痛感し、新しい研究の方向性を模索していた（河野勝「『政治理論』と政治学」井上・田村編『政治理論とは何か』（2014）；河野勝・三村憲弘「他者への支援を動機づける同情と憐れみ:サーベイ実験による道徳的直感の検証」『年報政治学 2015-1』（2015））。こうした背景から、一般の人々にとって身近なポピュラー音楽を概念分析のための素材として用いる、という本研究の着想が生まれた。

２．研究の目的

自由は、アメリカという国家の存立を、その誕生から今日にいたるまで一貫して支え続けてきた中心的概念である。また、自由は、より広く北米社会におけるさまざまな価値規範や行動指針を規定しているという意味でも、重要な概念でもある。そこで、本研究は、北米のポピュラー音楽の中で自由がいかに表現されてきたかを分析し、この概念の核心性と多様性を実証的に裏付けるとともに、それが時代とともにどのような変遷をたどってきたかを検証する。本研究の意義は、知識人や政治エリートの言説ではなく、広く親しまれている楽曲の歌詞を概念分析のテクストとして用いることにより、自由の概念を一般の人々が受容しかつ発展させてきたものとして捉え直すことにある。加えて、音楽誌ランキングのデータ化、歌詞の内容分析、音楽を発信する担い手へのインタヴューなど、多彩な分析手法を取り入れることで、政治学の重要な概念である自由に関して、従来までの研究では得られなかった知見を発掘することが目的である。

３．研究の方法

本研究では、北米における自由という概念の核心性および多様性を裏付け、それが時代とともにどのような変遷をとげてきたかを明らかにすべく、ポピュラー音楽の歌詞をテクストとして位置付け、独自のデータセットを構築し、その内容分析をさまざまな角度から行った。また、定量的な手法のみならず、特に有名な曲目についてのケーススタディーや音楽関係者へのインタヴューなどの定性的な分析方法を取り入れた。研究を計画した段階においては、本研究は、資料収集やデータセット構築、および単純な統計分析作業のために研究補助アルバイトとして大学院生を雇用する以外は研究代表者がほぼ単独で遂行する研究であると位置付け、大掛かりな研究体制を組織することはしなかった。しかし、以下で詳述するように、データ収集やデータクリーニングでは、当初想定しなかったような困難に直面したこともあって、アルバイトとして雇用した大学院生のうち、特に二名が単なる研究補助としての役割以上に、論文の作成に関与した。それゆえ、彼ら二人が共著者として論文に名前が記されていることをお断りする。また、本研究を遂行している間に、研究代表者の奉職する早稲田大学に、本研究の連携研究者であったハワイ大学の Sun-Ki Chai 氏が訪問研究員として、2019 年の 5-6 月にかけて滞在した。Chai 氏から、テキスト分析の進め方について貴重なアドバイスを頂いたこと、そして本研究の研究期間が終了した後も、本研究で得られた成果をさらに発展させる研究を共同で遂行するようになったことをここに記す。

４．研究成果

本研究の研究成果は、当初の研究計画に即して、４つの側面から構成される。すなわち、①<u>データセットの構築</u>、②<u>内容分析とパターン抽出</u>、③<u>ケーススタディー</u>、④<u>インタヴュー</u>、である。

1）データセットの構築：本研究は、テキスト分析の対象となるポピュラー音楽の楽曲を特定するため、代表的な音楽雑誌が定期的に発表するポピュラー音楽のランキングを、1960 年代まで

遡ってデータ化する作業から開始した。まず、音楽ランキングを発表している代表的な雑誌として、Billboard、NME（New Musical Express）、ローリング・ストーンの三つを選定し、それぞれのランキングの特徴を精査した上で、一貫性などの理由から Billboard を用いることを決定した。次に、そのランキングに基づいて、1960 年から 2016 年までの各年について、年間チャートの上位 20 曲を特定し、それらの楽曲の歌詞をダウンロードし、データクリーニングをほどこした。しかし、このようにして構築したデータセットを用いて予備的なテキスト分析を行ったところ、機械的な工程に頼ったデータクリーニングが完全でなく、手作業でしか修正できない問題が多く残っていることが判明した。さらに、テキストデータ収集は、ビルボードの各年の上位 20 曲に限定していたが、その中には自由という言葉が登場する曲が少なく、それを上位40曲にまで拡張することにした。さらに、各年に単発的にヒットした曲のみならず、長期にわたって歌い継がれてきた曲にも注目する必要から、そのような曲のランキングとして『ローリングストーンズ誌』が選ぶベスト 500 曲の歌詞も、テキストデータ化した。こうした事情から、データセット構築は当初の計画からはやや遅れたが、2年度目の終わりまでには完成した。

2） 内容分析とパターン抽出：上記のテキストデータを用いて、歌詞の中で free および freedom という言葉がどのように表出するかについてのパターンを、さまざまな角度から分析した。はじめに、表出パターンを一般的なシソーラス（“Thesaurus.com” (https://www.thesaurus.com/)）に基づいて分析した。その結果としては、当初の（やや漠然とした根拠に基づく）予想に反して、自由という言葉の使われ方は時代によって異なるとは言えない、というものであった。しかし、一般的なシソーラスでは、同義語を過度に拡張して含める傾向があるというデメリットを避けられない。そこで、次に、表出パターンを、より専門的かつ学術的な目的に特化した辞書に基づいて分析した。ここで用いたのは、主に心理学者たちのあいだで広く用いられる LIWC (Linguistic Inquiry and Word Count)である。その分析の結果では、自由という言葉が 1960 年代においては「悲しみ（sadness）」と関連づけて楽曲の中で使われていたのに対し、より最近ではむしろ「心配（anxiety）」や「怒り（anger）」といった感情と関連づけられて用いられている傾向がわかった。このように、LIWC を用いた分析からは、時代ごとに自由と関連づけられる意味合いの変化を読み取ることは可能である。しかし、残念ながら、政治的な意味合いを込めた free ないし freedom という言葉の用いられ方の変化を、分析結果から跡づけできるまでには至らなかった。なお、データ構築の詳細、内容分析の手順、一般的シソーラスおよび LIWC に基づくパターン抽出は、2019 年9月に、政治学のテキスト分析に関わる国際学会（POLTEXT）で報告した（Masaru Kohno, Masanori Kikuchi, Shinji Tsukada, “Freedom in American Popular Music: A Text Analysis of Top-ranking Song Lyrics from the 1960s to the 2000s.”）

3） ケーススタディー：定量的分析を進める傍ら、本研究では、北米において息長く人々から親しまれている10程度の代表的楽曲を選び、それらが創作されるにいたった経緯や背景を詳細に調査し、その歌詞にあらわれる自由の概念に込められた政治的、社会的なメッセージを明らかにするためのケーススタディーを行った。特筆すべきこととして、米国オクラホマ州タルサ大学にボブディランの資料を集めたアーカイブ‘が設立されたことを知り、コンタクトをとり、研究分担者である西川賢氏が当該機関を訪れて、関連する資料を収集した。申請段階から、研究代表者は「本研究でえられた知見や考察をより広く社会に還元すべく、政治学や政治理論研究に普段なじみのない一般的な読者を念頭においた単行本を刊行したい」という希望を持ち、このケーススタディーに基づいて『アメリカは自由をどう歌ってきたか』という単著を企画して、複数の出版社と出版に向けて交渉をした。そのうちの一つである朝日新聞出版から、選書という形での出版のオファーを受けたが、研究代表者はより広範な読者が期待される新書という形で公刊する試みを断念できず、引き続き出版企画を改訂するとともに、他の出版社との交渉も継続して行っている。

4） インタヴュー：本研究のもう一つの柱は、インタヴュー、すなわち北米の主要な都市において、ポピュラー音楽を実際に発信している関係者たちにインタヴューを試みることであった。本研究の研究期間中には、研究代表者の身内（母親）が二ヶ月近く入院するという事態が発生したり、またコロナウィルスの感染が拡大したりしたことにより、当初予定していた海外出張を延期することを余儀なくされた。それでも、北米の三つの都市を訪れ、ストリートミュージシャン、スタジオミュージシャン、音楽プロデューサーなど、20 人以上の関係者と聞き取り調査を行い、「自由」という言葉が歌詞に入っている楽曲、あるいは「自由」という言葉を想起させるような楽曲は何か、またとりわけ印象に残っている歌詞のフレーズは何かについて、インタヴューデータを収集した。このデータを分析した成果は、上記(3)の単行本企画の中へ取り入れる計画である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Masaru Kohno, Masanori Kikuchi, Shinji Tsukada
２．発表標題 Freedom in American Popular Music:A Text Analysis of Top-ranking Song Lyrics from the 1960s to the 2000s
３．学会等名 POLTEXT 2019: The 3rd International Interdisciplinary Symposium on the Quantitative Analysis of Textual Data（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	谷澤　正嗣 (Yazawa Masashi) (20267454)	早稲田大学・政治経済学術院・准教授 (32689)	
研究分担者	西川　賢 (Nishikawa Masaru) (10567390)	津田塾大学・学芸学部・教授 (32642)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関